夢窓幼稚園通信第80号

2016年　2月　29日

散髪をした翌日　早速子どもたちが声をかけてきます。
「えんちょうせんせい　かみ　きった！」　「つるつるに　なった！」
「ばすの　なかから　みて　すぐわかったでー」
こんな例は　誰が見てもすぐに分かる取るに足りないことですが、周囲の事柄に関心を持つことは素敵なことですね。　気持ちを向けないと、関係が持てませんからそれが縁をつける　はじめ　なのでしょうね。　縁をつけ、それを深めるかどうかはいつでも　こちらの側の意志が出発なのだと思います。

実際　子どもたちは、その瞬間へに"関心"を持って生きています。　そして　それぞれの子らしい素直さで、ひとつひとつのことに反応しています。　流れる雲に　くじらの形をみつけては大声をあげます。　誰かが恐竜の足跡をみつけたら、たちまち人だかりです。ちょうどいい具合の「さらこな日和」には、庭じゅう　坐りこむ子どもたちでいっぱいになることがあります。　関心を持って何かに近づき　反応することで、その何かを受けとめ応えるというやりとりの呼吸を通して、子どもたちは　この大地にしっかりと自分らしく立つことを覚え、自らを大きく確かなものとして育てているのでしょう。

「私」の内と外というものを思うとき、内の世界は私の思いのことであり、外の世界を身を置いている社会とするなら、いったい今、大人の私たちは自分の内と外の世界とにどのように関わっているのでしょうか？
ことによると、どちらに対しても　あまり上手に付き合いができていないかもしれません。ほんとうなら、一人ひとりの思いが生かされる器であり場であるはずの社会が　そうではなく、人々の願いや夢で社会をつむいでいるというよりも、どこからか価値や仕組が与えられているし、一人ひとりの思いも押し殺して小さなワクの中で　できるだけ生きやすく、幸せを感じられるように過そう・・・と思わざるを得ないようなところがあるのかもしれません。経済がうまく動くかどうかとか、国家全体がよりよく機能するか・・・などが中心に展開しているものを社会とするなら、それを「私の社会」とはなかなか思えないし私の思いも実感するのが難しいでしょう。

今、私たちは外なる世界である社会とも縁をしっかりと結べず、自分の思いがほんとうに何を求めているのかも見えにくく、内なる自分とも縁がつけずらいような状態を生きているような気がします。

祝福に満ちた幼ない子どもたちが、青少年期になるまでに内と外の世界に対して主体的で、よろこびをもって生きる大人となかなか出会えないとしたら、それはとても残念なことです。

「夢ばかり話っていたら将来生活していけないぞ」「社会は厳しいんだ、自分の思い通りになど生きられないのだから」‥‥と、言われ続けているようなものですから。

ほんとうそれでいいのでしょうか。
『アンパンのマーチ』の歌詞にあるように、一人ひとりが夢を持って生きられ、社会がそう生きられるような器にならないといけないのではないでしょうか。

なにが きみの しあわせ　　なにをして よろこぶ
わからないまま おわる　　そんなのは いやだ！
わすれないで ゆめを　　こぼさないで なみだ
だから きみは とぶんだ　　どこまでも ‥‥‥

アンパンマン（社会）は、みんなのゆめを守るためにいるんだとうたっているんですね。愛と勇気に支えられて‥‥

子どもたちが大きくおおきくなっていきます。次のときに向かって今日も進んでいます。私たちも自分の内と外に縁を豊かにつけながら、子どもの傍に立って人生を讃美して生きたいと思います。

園長　弁光泰雄